

かごしま農36景



中山間

バブル経済がはじけ、リゾート開発も失速した感がある。これに代わって、今や地域開発のキーワードは「中山間」だという。辞書に「山間」はあっても、「中山間」はない。どうやら役所言葉から生まれたようだ。それはともかく。山間地と平坦地の中間の地形条件を有する地域といったイメージだ。中山間では、農業を基幹産業とする地域が多いが、その基盤整備は立遅れ、過疎・高齢化の進行も著しい。

県は日置郡市来町玉田地区で中山間地域農村活性化総合整備事業を1990年から実施。長たらしい名前の事業だが、中身はほ場整備と公園などの生活環境の整備。この玉田地区は、4月下旬、ほ場整備に伴う農地集団化の最良地区として農林水産大臣表彰を受けた。農家が分散して所有、耕田する田・畑を1か所に集めること一集団化一によって農業担い手の経営規模を拡大するとともに、農作業効率が向上したことを認められての受賞だ。また、42区画の住宅用地と県道バイパス、公園の用地を確保したことも受賞理由になっている。

玉田地区は、東シナ海に注ぐ江口川の河口近くに開けた水田地帯。だが、遠見番山の裾野に位置するため、棚田をも含む地形条件。加えて、広くない面積に多数の農家、1戸あたりの規模は1反5畝（150アール）に過ぎない。このため、Sさんは授賞式の挨拶で、米作りの経費も賄えない規模と割高な工事費への思いから、これまで何回かほ場整備の話が出ては消えたと振り返った。続けて、事業実施に至った背景を紹介。過疎・高齢化の波は遠慮なく押し寄せ、トラクターの入らない水田に荒地が目立ち、そのまま放っておかず、毎晩のように話し合いを重ね、皆の理解と協力が得られたと、話し合いの大切さを強調。

私は傍らにいた関係者の1人Uさんに「先祖代々の土地だといって、面積が減ることを嫌う農家が2割近い減歩によく応じましたね」と尋ねた。彼は、「地域に担い手がいることで、事業をやっても無駄にならないことが分かった点が大きい」と答え、その次に総合的な土地利用計画を挙げた。農村では宅地など簡単に手に入るようだが、法規制のほか、道路や給排施設の関係もあってなかなか難しく、非農用地の確保と造成が意外に喜ばれていると。そして、「農地は持っているだけではお荷物。生かすことによって田・畑になり、金になることに気づいたんですよ」と。

(1995年5月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:樋渡 直竹「さっちゃんの日課」第4回かごしまフォト農美展